

## 自主シンポジウム 8

# 保育実践と「物語る」ことをめぐって

企画者 間藤 侑 (新潟青陵女子短期大学)  
 司会者 間藤 侑 (新潟青陵女子短期大学)  
 話題提供者 清水真砂子 (青山学院女子短期大学)  
 吉村真理子 (前、松山東雲短期大学)  
 指定討論者 戸田雅美 (鶴見大学女子短期大学部)

### 1. テーマ企画の意図

近年、保育実践を一つの物語としてとらえる考え方が注目されはじめています。もちろんすべての実践事例がそうであるという意味では決してないが、それは、保育臨床という新しい教育的概念とおそらく無関係ではないだろうし、心理臨床のカウンセリングやセラピイの事例を、すぐれて物語的であると捉える視点とはもっと深い相互関係があると思われる。

ただ、こうした関心は、これまでは、どちらかというところ一部の保育者や、主として臨床心理学や臨床教育学をバックとする少数の研究者などの間で論じられているのみで、「物語」そのものに関する領域で仕事をしている人たちと、少なくとも学会レベルでは、同じ主題でかつ同じ目の高さで語り合うことはほとんどなかったのではないだろうか。

この大会でも、保育や教育の場の問題について常に大きな示唆と励ましを与えてくれる臨床心理学者（臨床教育学という分野を拓いた）河合隼雄氏、また、児童文学を通して子どもと大人の関係を問い続ける灰谷健次郎氏の講演は、二つの大きな目玉と言え、保育者などもまじえた共通のテーマの下に、同じ壇上で語り合う場は残念ながら用意されていない。

本企画は、そうした問題意識に立って、児童文学や絵本の翻訳者、また児童文学分野の評論家として著名であり、かつ保育者養成大学の教員でもある清水真砂子氏を中心に、本テーマの趣旨にかねがね関心のある人たちで、必ずしも保育実践との直接的な関係にはこだわらずに、より広い感覚で自由に多面的に語り合いながら、参会者と共に、「物語る」というテーマに関わるお互いの問題意識を深めていってみたいと考えている。

例えば、幼児にとって親しみやすい絵本は、保育現場で直接すぐに役立つという点からも、養成校の保育内容などの授業教材として必ず使われていると思う。ページ数も少ないだけに、絵本は、物語り性という点

では比較的単純なものが多いとは言える。しかし、それをじっくりと見ていくと、その1ページ1ページの中に、時には豊かな物語を発見することも決して少なくない。ただそれは、作者がそれを意識して描いているかどうか、何かのメッセージを意図しているかどうかなどは問題ではない。あくまで読む側に委ねられていると言ってよいだろう。そうした取り扱いをどうしているだろうか。また、教科としては直接イメージのつながり難い、例えば臨床心理学などでも、絵本や児童文学やファンタジーが、教材として大きな興味をもたれている場合もある。

このように、こうした分野は直接の保育実践だけではなく、保育者養成とも深く関わり、卒業研究などでも決してマイナーではない。では、そうした学習体験がどういう形で保育実践や保育者の専門性と直接間接につながっているのだろうか。あるいはまた、保育実践がどのように具体的に「物語る」と結びつけて考えられているのか、そもそも「物語り」とは何かなど、いくらでも話題が広がっていきそうな気がする。

また、1992年の保育学会での大江健三郎氏による記念講演の中で、息子の光さんとの会話（手紙）を例に話された、「子どもは一瞬にして語る」という言葉が大変印象的だったことを思い出す。つまり、「物語る」という行為や意味は、必ずしも外部に表現される事柄の長短や複雑さと比例しているわけではないということである。そんなことも考えてみたい。

テーマを、「～めぐって」などと少しあいまいなものにしてきたのも、このように討論の展開をできるだけ自由にするので、それぞれの学問的立場や視座からの発言の交差がさまざまな問題点を引き出し、参会者とも積極的に討議できる可能性を広げたいと意図したからである。

### 2. 話題提供要旨

清水真砂子 (青山学院女子短期大学)

私たちは、大人も子どもも、数々の“物語”に囲まれて暮らしている。世界をどうとらえるか。物事をどう見るか。どう見たいのか。私たちは、それに対する態度決定、あるいは答えなしに生きていくことはできない。この答えを私は広い意味で“物語”と考えている。だから、このとき“物語”には音楽も美術も、そして哲学も科学も入る。日常的なレベルでの答えもすべて入る。

たとえば生まれてきたひとつの生命体は、そのままではすべてが不思議で、得体が知れなくて、私たちはその不思議さ、得体の知れなさに耐えられないから、懸命にそれに答えを見出そうとする。定義づけようとする。名づけである。名まえは、だから、世界で最も短い物語、とすることができるかもしれない。もっとも、人の名まえにもおそろしく長いものもある。先祖の名まえを十もつらねてそれを自分の名まえにしている人があることを、私はオーストラリア人の友人から聞いたことがある。そこにも名づけた人々の“物語”がある。ひとつの植物を、ある人々は「花いかだ」と呼び、ある人々は「嫁の涙」と呼び、また別の人々は「継子のやいと」と呼ぶとき、そこにはひとつの植物に託すそれぞれの人の“物語”がある。それぞれの人の答え方があり、そして、その背後には、それぞれの人の暮らしがあり、歴史がある。

幼い人たちも、すでに“物語”に囲まれるだけでなく、いまだ、どんなに乏しくあろうと、それぞれの手持ちの物語を生きだしている。子ども同士の会話を聞いていると、「～はこういうものよ」とか、「～はこうするものなの」という言いまわしがきわめて多いことに驚かされるであろう。これは子どもたちが親や身近な大人たちの“物語”を借りて、それにのっとって生きていることを示しているとは言えないだろうか。大人にとってと同様、子どもたちにとっても、そうした“物語”は、武器ともなれば、枷ともなっている。すでにある“物語”には、そして日々生成されつつある“物語”にも、貧しいものもあれば、豊かなものもある。

イギリスの作家、ジョン・エイキンは、「作家の任務とは、子どもたちにむかって、この世界は単純な場所ではないことを示すこと」（『子どもの本の書き方』）だと言ったが、このことばは作家のみならず、親にも教師にもあてはまる。これはもちろん“物語”は複雑でなくてはならない、ということではない。言ってみれば、「～ものよ。」に対抗し、それを相対化する“物語”をどれだけ生み出せるか。生み出すのが余りに困難ならば、そうした“物語”をどれだけ、これまでの文化の蓄積の中から借りてこられるかである。

そのためには私たち大人は生まれたてのように世界を見る目と同時に、人類の歴史と文化の中に自他を置いてみる目、すなわち、「うんと子どもで、うんと大人」であることが求められるであろう。

吉村真理子（前、松山東雲短期大学）

### 1) 保育実践を『物語る』ととらえる意味

保育実践を「物語る」という言葉で捉えるのは、切り取られた場面ではなく、過去から未来へ流れている時間系列の中で、現在の行為の意味を見出そうとしているからであろう。従来の活動重視の保育案では、その前後が断ち切れ、活動に参加する態度や、活動のねらいの達成度が評価の対象になるきらいがあり、その反省もこめれているように思う。

しかし、子どもの行動は、それまでのさまざまな生活に影響され、同じ活動でも時によって全く様相が変わるものである。目の前の子どもの姿を過去の延長として見続け、この先どのように援助していけば、子ども自身のねらいと保育者のそれを一致させることができるのかという展望をもつことが、「物語る」という意味ではないのだろうか。つまり、保育者が子どもの人生を一つの「物語り」と捉え、その生の現実に取り添いながらいっしょに「物語」を作っていこうとする姿勢である。

### 2) 子どもに物語を聞かせる意味

子どもが物語と出会うのは、言葉によるイメージが定着し始め、記憶力が増し、物事の因果関係を理解し始める2歳ごろからである。単純なストーリーを喜んで聞く。『さんびきのこぶた』や『あかずきん』のような架空の物語を、親しみを持った主人公に自己を投影させながら、さまざまな感情体験をする。子どもの実生活は限られているが、物語を聞くことにより、何倍もの別の人生を主人公と共に味わうことができる。このことは、実生活でさまざまな出来事に遭遇した場合の判断の基準が増え、より多くの対応ができる可能性につながるのではないだろうか。

### 3) 保育者が物語を読む意味

保育者が物語を読むのは、教材研究とは別に、物語の中にある子どもを通して現実の子どもを理解し、人間とは何か、人生とは何かを洞察するためでもある。

保育と物語はきわめて似通っている。子どもの遊びはほとんどが疑似体験である。ままごとでは、それぞれの子どもが役割を担い、その役割に合った人格を演じながら遊ぶ。しかも、ストーリーの展開は子ども自身に任されている。つまり、子どもたちは絶えず物語を創造しながら生きていると言える。そうした子どもの姿への共感を深めるためにも、すぐれた児童文学に数多く接することが望ましいと考えている。